

## 考古学のための民具 2・漁具

### Material cultures of routine work for the archeological study (2): fishing equipments

渡辺 誠 (WATANABE Makoto)<sup>1)</sup>

1) 名古屋大学名誉教授  
Emeritus Professor of Archaeology, Nagoya University

#### Abstract

The different kinds of fishing equipments have been remarkably developed in the Japanese Archipelago since the Jomon period and devised depending upon the habitats of the fish. Of these, identification of stone net sinkers is sometimes difficult because of the absence of working. Thus the comparison with the modern items is necessary to judge whether they were actually used for net sinker or not. At present our collection contains such modern items as 7 fishhooks, 14 octopus lures, 6 stone sinkers for long line fishing, and etc. It is needless to say that the study on modern fishing gears contributes to omit the sampling errors in the excavations.

#### I. 考古学のための漁具コレクションの意義

日本列島においては、漁具は縄文時代以来きわめて発達している。それらは、各地域の自然環境に差異に基づく各種の魚類の生態に対応して様々である。またそのなかには石錘のようにまったく加工痕がないため、遺物として認識されず取り上げられない場合もある。したがって漁具の機能研究の必要性ばかりでなく、発掘時のサンプリング・エラーを防ぐためにも、民具の漁具の研究と資料の収集は不可欠である。

この目的を達成するためには、本コレクションは十分ではない。しかしながら一見自然石にすぎない石錘のように、特徴的な資料も含まれている。

資料総数は32点で、内訳はタコ用漁具14点、釣針7点、延縄用石錘6点、その他5点である。

記載に当たっては1:名称と若干の説明、2:採集地または寄贈者と年月日、3:法量、4:備考の順に記す。また、挿図・写真の番号は資料番号と一致させている。

そしてその後、これらによる若干の研究成果について紹介することにする。

#### II. タコ用漁具資料リスト

##### 資料1. (写真1-1)

- 1: タコツボ。褐色。
- 2: 福島県いわき市久之浜町立の漁師・新妻武徳氏より、平成元年吉野高光氏が入手したものを寄贈される。
- 3: 口径20.3 cm、高さ20.0 cm、底径11.5 cm。底部に直径3.0 cmの紐通し孔が穿孔されている。
- 4: 新妻武徳氏の屋号は「かわしめ」であるが、本資料の胴部には「山十」と書かれている。これは、

底引網で引き揚げられたもので、本来の持ち主がタコ漁をしなくなったため、返却されずに新妻氏の手元にあったものを、資料2とともに吉野氏が貰い上げたということである。タコツボ自体は、相馬地方で焼かれたものであるらしい。

資料2. (写真1-2)

- 1: タコツボ。褐色。
- 2: 資料1に同じ。
- 3: 口径18.8 cm、高さ19.8 cm、底径11.0 cm。底部に3.0 cmの紐通し孔が穿孔されている。
- 4: 資料1に同じ。

資料3. (写真1-3)

- 1: タコツボ。褐色。
- 2: 愛知県佐久島。1991年6月6日。
- 3: 口径15.1 cm、高さ22.6 cm、底径13.4 cm。
- 4: 入手経緯不詳。

資料4. (写真1-4)

- 1: タコツボ。褐色。
- 2: 愛知県佐久島。1991年6月6日。
- 3: 口径15.0 cm、高さ22.6 cm、底径13.2 cm。
- 4: 入手経緯不詳。

資料5. (写真1-5)

- 1: タコツボ。橙褐色。
- 2: 兵庫県明石市大久保町江井島、資料6とともに牧野敏男氏寄贈。1987年8月10日。
- 3: 口径13.0 cm、高さ25.8 cm、底径9.0 cm。
- 4: 牧野氏はタコツボ・イイダコ壺を窯で焼いている生産者。

資料6. (写真1-6)

- 1: タコツボ。橙褐色。
- 2: 兵庫県明石市大久保町江井島、牧野敏男氏寄贈。1987年8月10日。
- 3: 口径12.8 cm、高さ22.4 cm、底径8.0 cm。
- 4: 資料5に同じ。

資料7. (写真1-7)

- 1: タコツボ。
- 2: 熊本県天草郡倉岳町、資料8とともに歳川喜三生氏寄贈。1992年1月8日。
- 3: 口径15.0 cm、高さ28.5 cm、底径13.8 cm。底部に1.5 cmの紐通し孔が穿孔されている。
- 4: フジツボが付着していて、よく使われていたことがわかる。

資料8. (写真1-8)

- 1: タコツボ。
- 2: 熊本県天草郡倉岳町、歳川喜三生氏寄贈。1992年1月8日。
- 3: 口径15.0 cm、高さ25.5 cm、底径12.5 cm。底部に2.4 cmの紐通し孔が穿孔されている。
- 4: 資料7と同じ。ただし底から吊るすのではなく、口の方で吊るす。

資料9 (写真2-9)

- 1: イイダコ漁用アカニシ。

- 2：石川県羽咋郡押水町今浜採集。山本直人氏寄贈。1983年7月20日。
- 3：高さ15.4 cm、幅17.6 cm。
- 4：タコツボ同様に、延縄につけて使用。

資料10 (写真2-10)

- 1：イイダコ漁用ベンケイガイ。
- 2：石川県羽咋郡押水町今浜採集。山本直人氏寄贈。1983年7月20日。
- 3：高さ7.5 cm、幅9.0 cm、厚さ4.8 cm。
- 4：資料9に同じ。

資料11 (写真2-11)

- 1：イイダコ漁用ウチムラサキ。
- 2：兵庫県明石市江井島港採集。1987年8月10日。
- 3：高さ6.8 cm、幅8.7 cm、厚さ4.7 cm。
- 4：資料9に同じ。

資料12 (写真2-12)

- 1：イイダコ漁用ベンケイガイ。
- 2：大韓民国慶尚南道？。ソウル特別市鐘路区仁寺洞の骨董店・青雁で購入。
- 3：高さ6.5 cm、幅7.5 cm、厚さ4.5 cm。
- 4：6世紀代の陶質土器中に20個位はいていたものの、最後の1対である。

資料13 (写真2-13、写真7-1)

- 1：マダコ用釣針。
- 2：大韓民国慶尚南道泗川市 (旧三千浦市)
- 3：長さ15.0 cm、幅2.8 cm、厚さ6.3 cm。
- 4：Ⅵ・若干の検討の項参照。

資料14 (写真2-14)

- 1：マダコ用釣針。
- 2：島根県隠岐郡西ノ島町浦郷の釣具屋にて購入し、内田律雄氏寄贈。1990年9月24日。
- 3：長さ17.0 cm、幅2.9 cm、厚さ6.5 cm。カニ部分高さ9.8 cm、幅13.5 cm、厚さ2.7 cm。
- 4：写真13に類似するが、対象が異なる。

### Ⅲ. 釣針資料リスト

資料15 (写真3-15)

- 1：サメ用釣針。
- 2：牛窓市加瀬浦。山下義満氏寄贈。1991年12月20日。
- 3：全体の長さ597.5 cm。釣針部分長さ6.0 cm、幅4.3 cm、厚さ0.6 cm。
- 4：鯖屋跡採集品。

資料16 (写真3-16)

- 1：マグロ用釣針。
- 2：山下義満氏寄贈。1991年12月20日。
- 3：全体の長さ22.0 cm。釣針部分長さ13.1 cm、幅6.8 cm、厚さ0.7 cm。
- 4：岩崎家跡採集。昭和12・3年頃使用。

資料17 (写真4-17)

- 1 : アラ用釣針。
- 2 : 山下義満氏寄贈。1991年12月20日。
- 3 : 全体の長さ30 cm。釣針部分長さ4.6 cm、幅2.5 cm、厚さ0.35 cm。

資料18 (写真4-18)

- 1 : カツオ用釣針。
- 2 : 山下義満氏寄贈。1991年12月20日。
- 3 : 全体長さ9.5 cm、幅2.7 cm、厚さ0.9 cm。釣針厚さ0.3 cm。

資料19 (写真4-19)

- 1 : マダイ用釣針。
- 2 : 山下義満氏寄贈。1991年12月20日。
- 3 : 全体の長さ276.0 cm。釣針大長さ2.5 cm、幅1.7 cm、厚さ0.25 cm。釣針小長さ2.2 cm、幅1.5 cm、厚さ0.2 cm。

資料20 (写真4-20)

- 1 : 延縄漁釣針。
- 2 : 熊本県天草郡倉岳町宮田、洲上七郎氏寄贈。1991年12月20日。
- 3 : 全体の長さ61.0 cm。釣針部分長さ5.3 cm、幅2.6 cm、厚さ0.4 cm。

資料21 (写真4-21)

- 1 : 釣針。対象魚不詳。
- 2 : 山口県阿武郡田万川町江崎採集。1990年11月。
- 3 : 全体の長さ30.6 cm。釣針部分長さ4.5 cm、幅0.2 cm、厚さ0.2 cm。

#### IV. 延縄用石錘資料リスト

資料22 (写真5-22)

- 1 : 延縄漁用石錘。
- 2 : 巖原町浅藻採集。熊本県天草郡倉岳町、洲上七郎氏寄贈。1991年12月20日。
- 3 : タテ11.1 cm、ヨコ11.9 cm、厚さ5.8 cm、重量1205.5 g。珪化した細粒砂岩。
- 4 : クエ (アラ) 用。

資料23 (写真5-23)

- 1 : 延縄漁用石錘。
- 2 : 上対馬町比田勝採集。熊本県天草郡倉岳町、洲上七郎氏寄贈。1991年12月20日。
- 3 : タテ10.8 cm、ヨコ11.9 cm、厚さ5.4 cm、重量1036.7 g。砂岩。
- 4 : クエ (アラ) 用。

資料24 (写真5-24)

- 1 : 延縄漁用石錘。
- 2 : 五島採集。熊本県天草郡倉岳町、洲上七郎氏寄贈。1991年12月20日。
- 3 : タテ8.1 cm、ヨコ12.0 cm、厚さ5.4 cm、重量729.7 g。砂岩。
- 4 : マダイ用。

資料25 (写真5-25)

- 1 : 延縄漁用石錘。

- 2 : 五島採集。熊本県天草郡倉岳町、洲上七郎氏寄贈。1991年12月20日。
- 3 : タテ8.4 cm、ヨコ10.1 cm、厚さ5.5 cm、重量679.4 g。砂岩。
- 4 : マダイ用。

資料26 (写真5 - 26)

- 1 : 延縄漁用石錘。
- 2 : 五島採集。熊本県天草郡倉岳町、洲上七郎氏寄贈。1991年12月20日。
- 3 : タテ7.1 cm、ヨコ10.0 cm、厚さ4.5 cm、重量481.0 g。流紋岩。
- 4 : チシャ (イシダイ) 用。

資料27 (写真5 - 27)

- 1 : 延縄漁用石錘。
- 2 : 熊本県天草郡倉岳町、洲上七郎氏寄贈。1991年12月20日。
- 3 : タテ9.5 cm、ヨコ12.8 cm、厚さ4.4 cm、重量750.9 g。砂岩。
- 4 : 紐の結び方の見本。

## V. その他

資料28 (写真6 - 28)

- 1 : ガラス製笠。
- 2 : 秋田県中仙町押切・宮城商店にて購入。1989年11月28日。
- 3 : 口径7.0 cm、高さ32.0 cm、底径14.0 cm。
- 4 : 布で栓をする。

資料29 (写真6 - 29)

- 1 : ガラス製笠。
- 2 : 野田市中野台・白石商店にて梅咲直照氏購入・寄贈。1992年7月8日。
- 3 : 口径5.0 cm、高さ24.0 cm、底径10.0 cm。
- 4 : 割れると危険なので、使用禁止になっており、入手できること自体が珍しい。

資料30 (写真6 - 30)

- 1 : タケポッポ。
- 2 : 島根県松江市宍道湖の漁師・岡本茂氏寄贈。
- 3 : 長さ62.0 cm。
- 4 : ウナギ捕り用。

資料31 (写真6 - 31)

- 1 : アワビ漁用漁具。採集袋。
- 2 : 韓国済州島の骨董店で、江坂輝弥先生を介して購入。
- 3 : 枠の径40.0 cm、高さ57.5 cm。

資料32 (写真6 - 32)

- 1 : アワビ漁用漁具。浮き。
- 2 : 資料31に同じ。
- 3 : 長径32.0 cm、短径30.0 cm、高さ21.8 cm。
- 4 : 資料31とセット。

## Ⅵ. 若干の検討

### 1. タコの種類と漁具

タコ類は大中小の3群がある。日本では大型のマダコなどと、小型のイイダコが一般的である。中型のテナガダコは日本では一般的でないが、韓国ではよく食べられている（韓国名：ナクチ）。

日本では、大型のマダコなどはタコツボで捕るほか、釣針も使われる。タコツボは延縄として海底に沈められる。延縄の本縄に接続する道縄の先に、口頸部を結んだもの（資料3～6・8）と、底部に穿孔して逆さに紐を付ける場合（資料1・2・7）とがある。口頸部のくびれは砂が入って重くならないように、使用する場所との関係で異なる。

またカニなどを好物とするため擬餌としてカニが付けられるが、資料14はプラスチックでカラフルに作られている。

小型のイイダコは、イイダコ壺や貝などが使われる。貝には巻貝（アカニシ・資料9）と、二枚貝を左右セットで殻頂部に穿孔し、紐を通して使う場合とがある。アカニシは文字どおり内面が赤くイイダコが特に好むため、よく使われている。マダコの場合も同様であり、資料5・6は明るい橙褐色を呈しているが、これは焼きあがり直前に窯に塩を入れたことによる塩焼けの色である。

二枚貝の場合ベンケイガイが一般的であるが（資料10）、ウチムラサキなども使われる（資料11）。韓国においてもベンケイガイが使われているらしい。資料12は6世紀代の陶質土器に入っていたが、漁師がそれを利用しただけで、古代に遡るものかどうかは別問題である。

韓国ではナクチがよく食べられるが、これは釣針で捕獲される。細く長い足を吸盤を取らずにスライスし、刺身としてよく食べられている。また、鍋にも入れられる（次項参照）。

タコツボ同様に、これらの漁具はいずれも延縄漁で使われるものである。

日本ではすでに弥生時代中期からイイダコ壺が延縄漁として使用されたいことが明らかにされている（中川1988）。

### 2. ナクチ用釣針入手時の聞き取り

資料13を入手した靉島（ヌクト）は、韓国南海岸の小さな島である。韓国東南部の慶尚南道にあつては、東の釜山市に匹敵する西の港湾都市であるところの、旧三千浦市（現泗川市）の沖合いにある。1985年10～11月にこの貝塚が釜山大学校博物館によって発掘され、私も見学に行った。釣針は、その時に同島の金成実氏により頂いたものである。これは韓国語でモノとよばれるタコを釣るための釣針である。

全長15.3 cm、幅2.3 cm、厚さ5 mmの竹の板の下部に針をとりつけ、上部には鉛の錘がとりつけられている。いずれもとりつけは針金でなされている。上端よりには針金の輪が作られており、これに釣針がつけられている。重量は107.6 gである。

針は太さ2 mm、長さ約11 cmの針金を二つに折り、上部と中間とを板に固定してから「し」の字状に曲げている。かえしはない。

板は上面に表皮側を使い、錘のとりつけられた上部に対し、針のとりつけられた下部では、幅1.4 cmと細くなっている。ここには針の他に餌もとりつけるらしく、そのため直径3 mmの孔が、2個あけられている。この餌つけは、三千浦の港に戻ってから、作業光景をみることができた。

魯山公園をはさんで三千浦港の東側にあたる海岸を朝散歩していた時に、タコ釣針に餌をつけている家族に出合った。おしゅうとさんと若奥さん、それに子供が3人である。

これは同じ形態でありながら、小型のテナガダコ漁用に使われている。韓国語ではナクチとよばれ、その生きづくりの刺身はうまい。普通のタコの場合は釣針1本で流すが、ナクチの場合はのべなわにす

るといっていた金成実さんの話を思い出した。

エサはどちらもカニである。海岸でよくみかける小型のカニで、この生きたカニを2個ずつ結わいつけていた。のべなわ1本に100個の釣針がつけられるのであるから、全体では200匹必要とされる。しかもこれを何連も流すとなると、カニ集めだけでも結構な労力がかかるように思われた。YANCHACLUBのシャツを着た坊や達は、ひょっとしてカニ集めのベテランであったかもしれないが、私の韓国語ではそこまでは聞きだせなかった。

なおこの釣針の錘は、タイルを使っている。

### 3. サメ用釣針

きわめて鋭いサメの歯で食いちぎられないように、釣針に直接続くハリスには針金やそれを加工した鎖などが長く続き、それに道縄が接続して本縄に結び付けられている。例えば熊本県下の資料15はハリスの長さが約6mである。愛知県篠島の写真7-2は長さが約1.2mである。

そしてその工夫は古代に遡り、愛知県日間賀島北地第4号墳の鉄製釣針を名古屋大学文学部考古学研究室においてソフトX線撮影を行ったところ、錆を透過して軸頂部が環状になっていることが明らかになり、サメ用釣針であることが実証された(渡辺編1988)。写真7-3がそれであり、左より外形写真・ソフテックス写真、右はこれに基づく実測図である。そのサイズは、錆のついた状態で長さ7.5、現存幅3.3cmである。

そしてソフトX線撮影の結果では、長さ7.4cm、現存幅3.1cmである。これは超大型に属するサイズである。軸頂部の残りはきわめて良好で、外見上は丸みを呈している。これは腰部で6mmあった直径が軸部では5mmとなり、さらに上部では直径2mmまで叩きのばされ、これを逆時計回りに二周させて環状にしているからである。その環状部分のなかに、同じく直径2mmの鎖の一部が残存していた。いうまでもなくこの鎖は、サメの鋭い歯によって釣糸を食いちぎられないための工夫なのであり、先に記した民俗資料におけるサメ釣針では、この鎖の部分だけで長さが約120cmもある。

そして軸頂部を環状にしている例は、神奈川県平塚市真土十七の域遺跡からも1点出土している。これは7世紀後半に属す。完形で、無錆であり、長さ5.3cm、幅1.5cm、直径2mmであり、軸頂部は針を逆時計回りに三周させて環状にしている(渡辺編1987)。

続く8世紀代の奈良時代には、愛知県下からは平城宮へサメの干物の貢納されたことが、平城宮出土の木簡から明らかである。

また近世・近代にも盛んにサメが捕獲されている。これらは中華料理の材料であるフカヒレとして長崎から盛んに輸出されていた。資料15の熊本県下の例にも、そのような背景がある。

### 4. 延縄用石錘

この研究の発端は神奈川県三浦市間口洞窟出土の石錘である(写真7-4)。石質は不明であるが、表面のきわめて滑らかな石である。タテ7.4cm、ヨコ8.9cm、厚さ3.2cm、重量300gであり、弥生時代中期後半宮の台式に属す(神澤1972)。

発掘された神澤勇一氏は使用痕のある石として報告書の図版22-53に紹介しているが、用途不明とされていた。筆者も拝見当時分からなかったが、1990年11月熊本県天草郡五和町歴史民俗資料館において写真8-1を見るに及んで、延縄用の石錘であることが理解できた。これにはきつく結ばれた紐の下にマッチの軸ぐらいの木が強引に差し込まれている。このため傷がつくのであるが、木は海中で水分を吸いわずかに膨張することによって、紐の抜け落ちるのを防止している。2002年の11月13日、偶然にも間口洞窟の前の海岸において、三浦市教育委員会の須田英一氏が類例を採集した。これはタテ3.5cm、ヨコ6.1cm、厚さ2.5cm、重量85.1gであった(写真8-2)。

これらの石錘について、熊本県天草郡倉岳町の漁師・岡本茂氏より詳しく伺った話は以下のとおりである。たとえば資料27は私の取材に応じて紐を結んでくれたものであるが、とてもきつく締められている。しかしこれはやってみせただけで、海に入れたらすぐ抜け落ちてしまうということであった。では紐の脱落を防ぐために、少し打ち欠いたらどうかという質問に対して、そういうことをすると波にもまれて紐が切れてしまう、必ず自然石のまま使わなければいけないという答えであった。このことによって、粗い打ち欠きしか施されていない礫石錘は、漁網錘ではないとの一層の確信を得た。資料22～25は、捕る魚の種類によって使い分けがなされているが、それは使用する海域の条件によるものであり、どの魚であれば何グラム前後という風には言えない。そして一晩で1 kmも流される場合もあるということである。たとえば資料24のマダイ用に使われるものが約730 gであるが、一方同じくマダイ用に使われている、福岡県前原市の伊都国歴史民俗資料館所蔵資料の場合、平均98.7 gであり、天草例の約7分の1程度である。箱のなかには43個の石錘が入っていたが、重量以外の法量は平均タテ4.2 cm、ヨコ6.2 cm、厚さ2.7 cmであり、サイズも小振りである（写真8-3）。

間口洞窟の出土品にはじまり、間口海岸の民俗例に舞い戻ったことによって、上記の弥生中期のイイダコ壺の場合とともに、三浦半島でもほぼ同時期に延縄漁が始まっていたことが推測できる。この場合の延縄漁は、間口洞窟などにイイダコ壺や穿孔された貝類などがみられないことから、釣漁であったと推定される。縄文時代の鹿角製釣針と弥生時代の鉄製釣針とを比較した場合、材質が違えばかりでなく、漁法にも変化があったとみる可能性が出てきた。これはさらに検討を深めていくべき課題である。

## 5. その他

その他の中でとりあげた資料28・29の釜はガラス製であるが、釜は本来タケ製品が主流である。それらについては、(考古学のための民具)の趣旨のもとにまとめた「タケ・ワラ以前の編組製品」(渡辺1999)の中で多数紹介している。それらと比較すると、ガラス製品は近代における特異なものであることが明らかである。

## 引用文献目録

- 中川 渉 (1988) 瀬戸内のイイダコ壺とマダコ壺 - 兵庫県玉津田中遺跡を中心に - 季刊考古学, **25**, 55-58, 東京.
- 神澤勇一 (1972) 間口洞窟遺跡・資料編. 神奈川県立博物館発掘調査報告書, **6**, 横浜.
- 渡辺 誠 (1999) タケ・ワラ以前の編組製品. 名古屋大学古川総合研究資料館報告, **15**, 73-101.
- 編 (1987) 考古資料ソフテックス写真集第2集. 名古屋大学文学部考古学研究室.
- 編 (1988) 考古資料ソフテックス写真集第3集. 同上.

## 謝 辞

本稿をまとめるに際しては、次の方々から多くの御教授と御協力を仰ぐことができた。末尾ながら御氏名を銘記して、深謝の意を表する次第である（五十音順、敬称略）。

内田律雄、梅咲直照、川口徳治郎、洲上七郎、鈴木和博、須田英一、角 浩行、高山 純、  
歳川喜三生、中川 渉、山下義満、吉田泰幸、吉野高光、渡辺直哉。



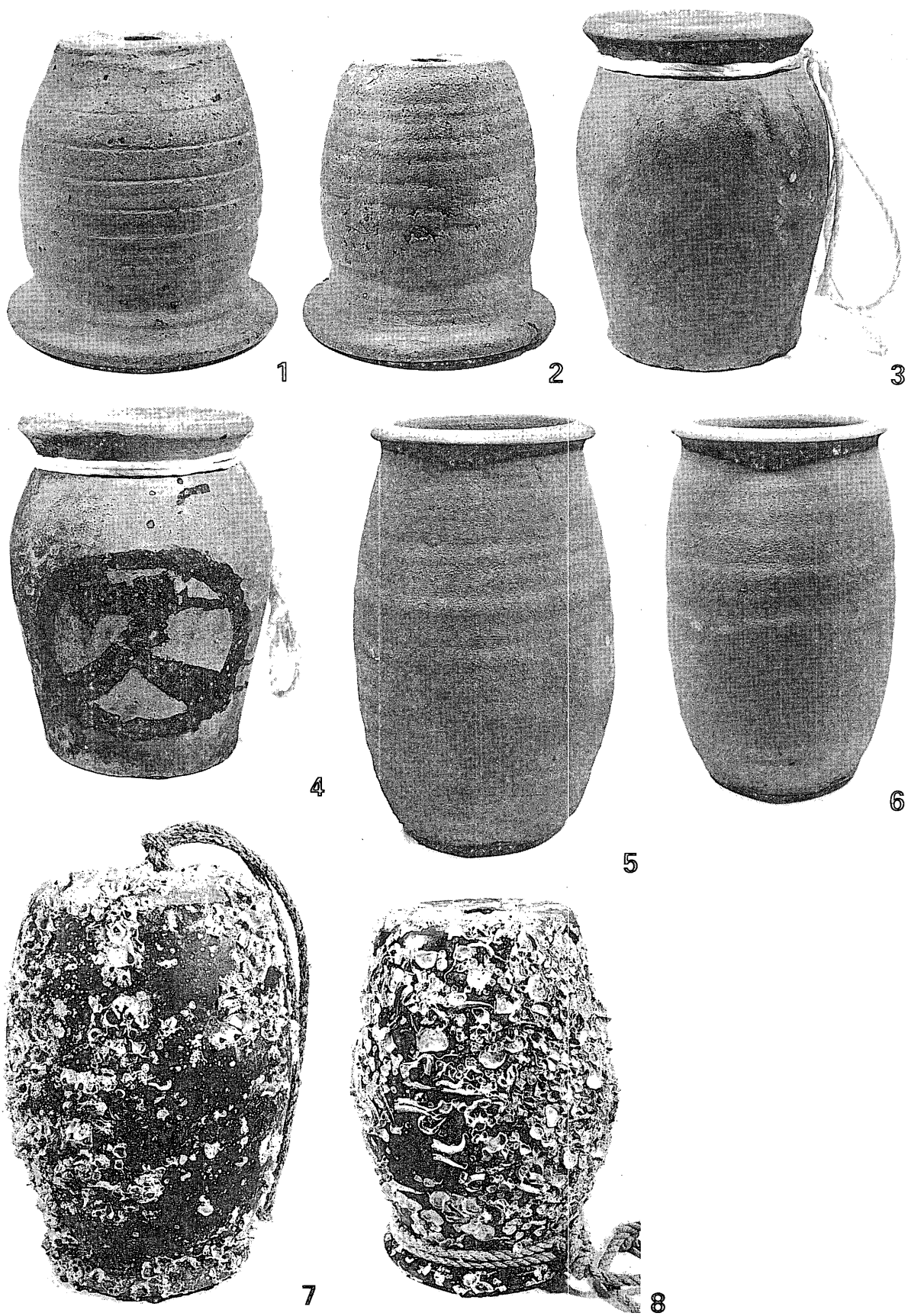
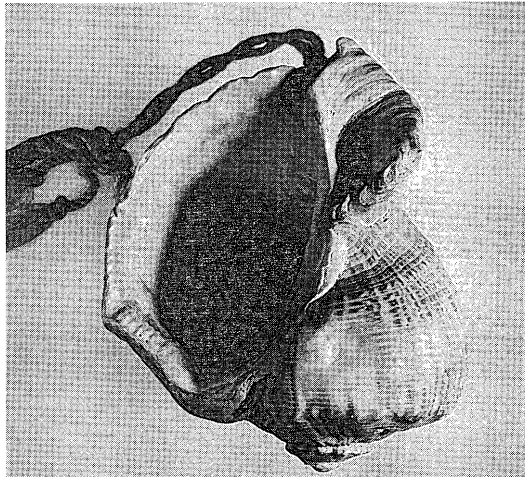
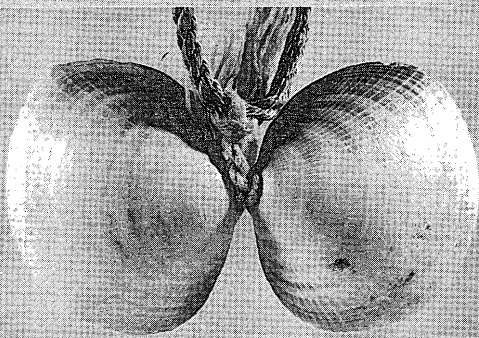


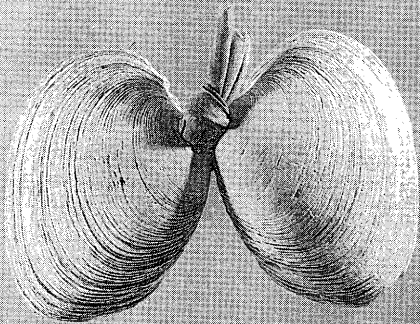
写真1 タコ壺 (縮尺: 不同)



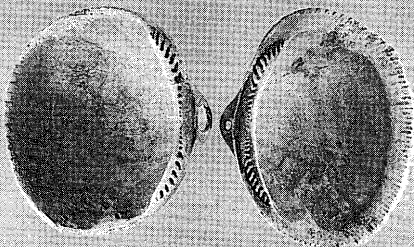
9



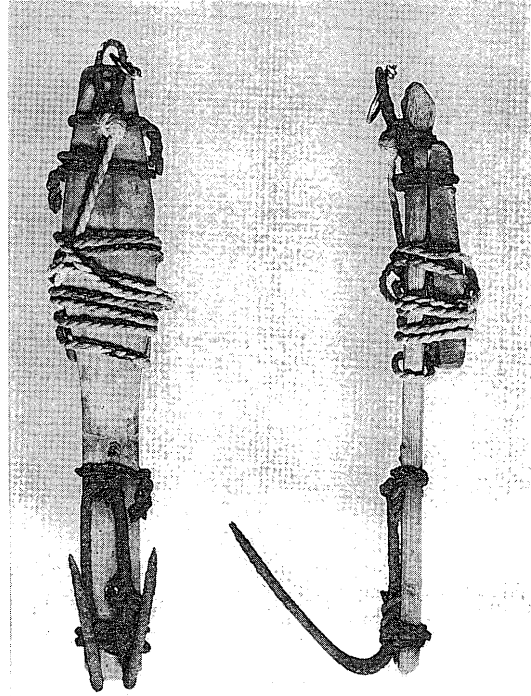
10



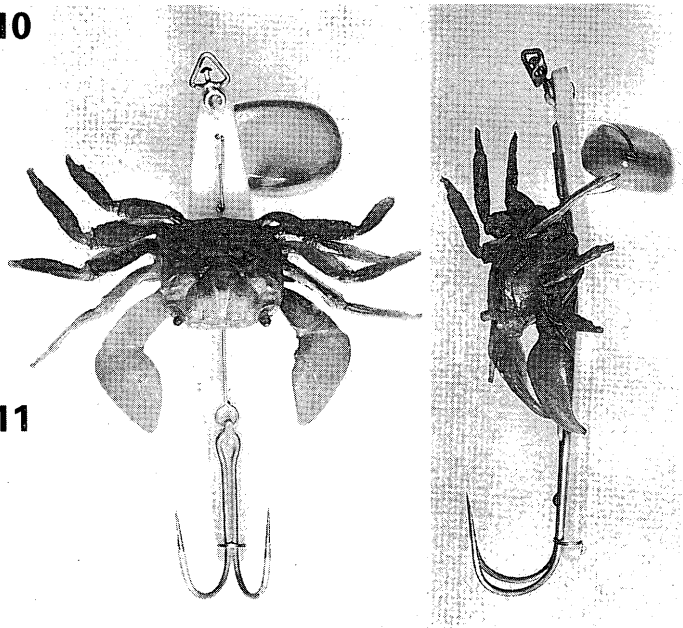
11



12

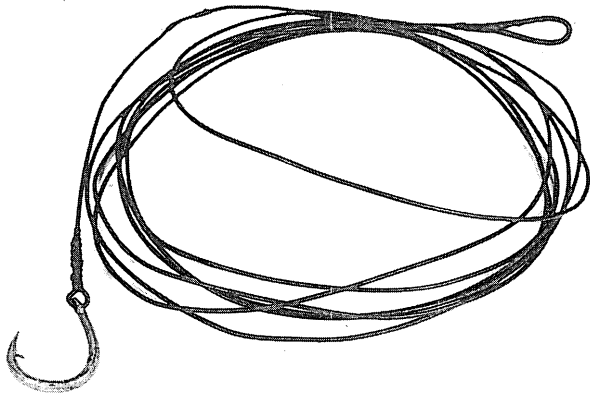


13

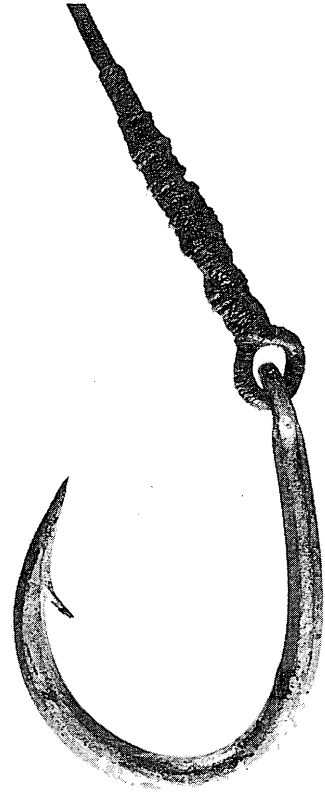


14

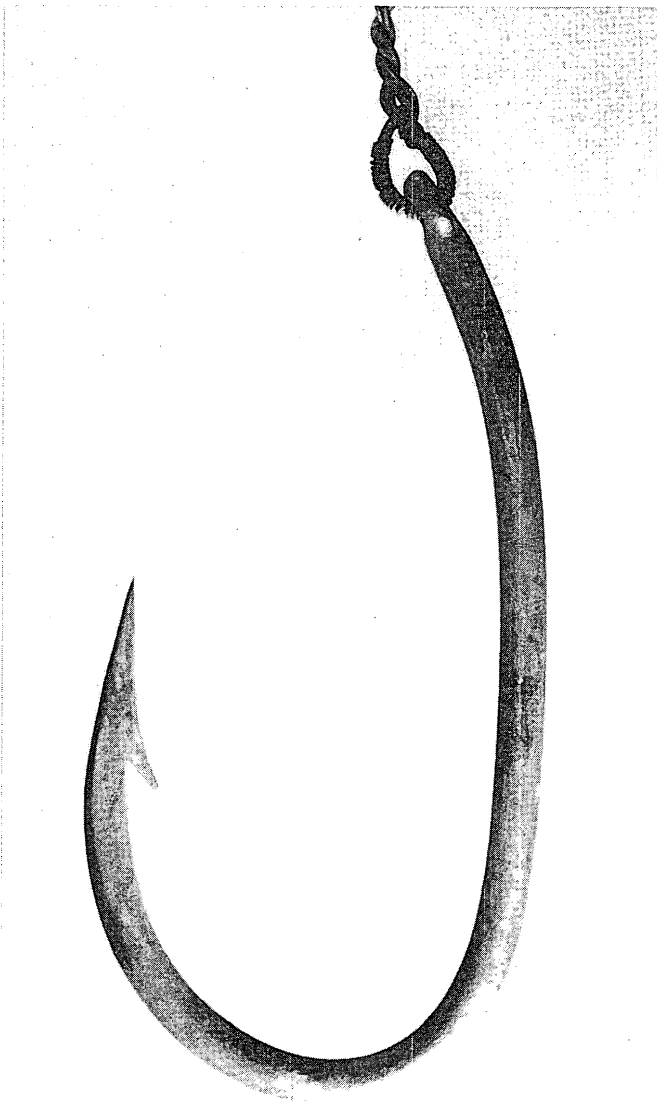
写真2 イイダコ漁用具類と釣針1 (縮尺: 不同)



15



15a



16a



16

写真3 釣針2 (縮尺: 15a・16aのみ実大)

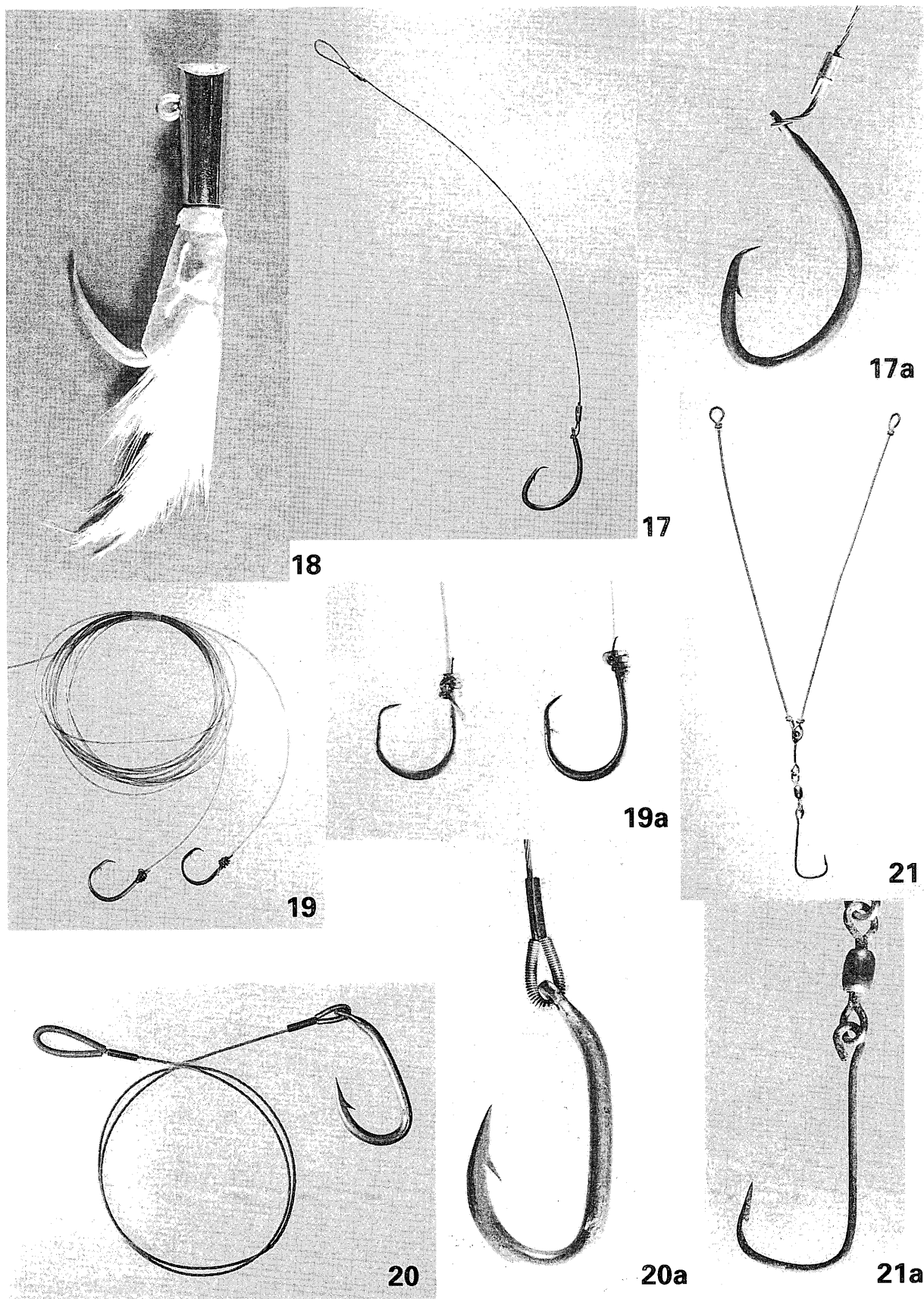
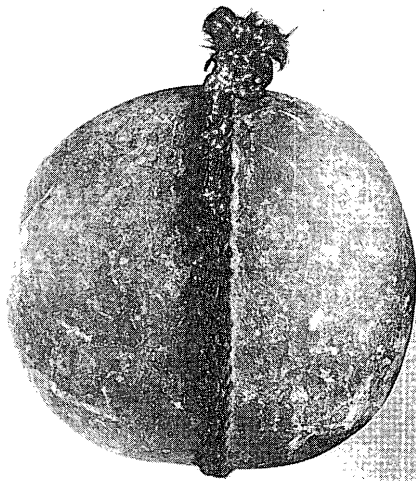
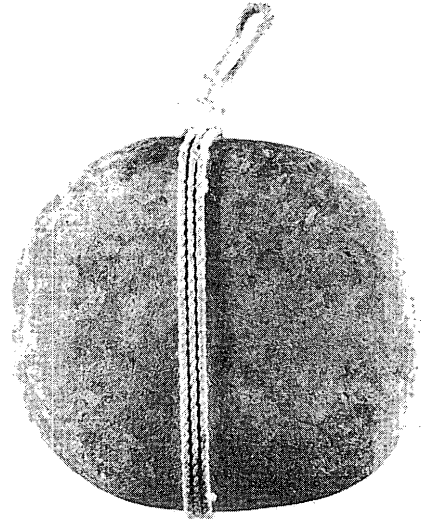


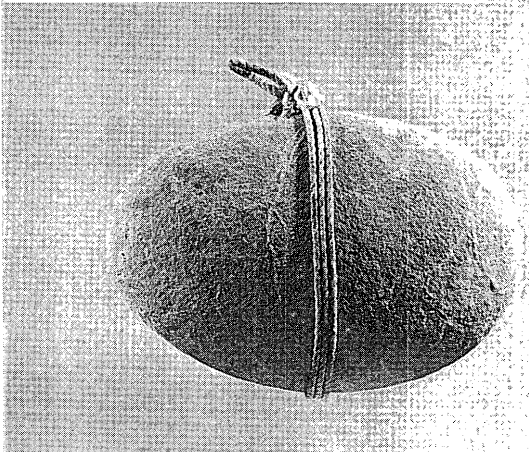
写真4 釣針3 (縮尺：17a・18・19a・20a・21aのみ実大)



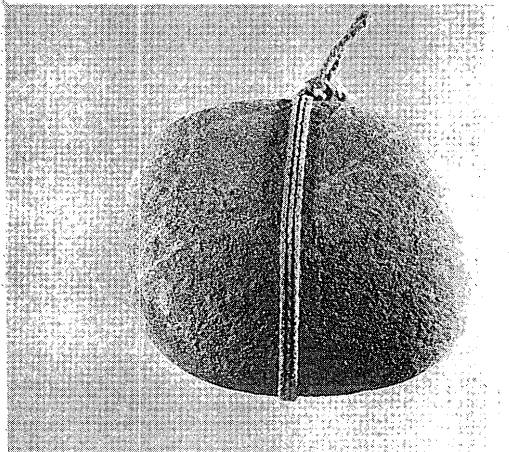
22



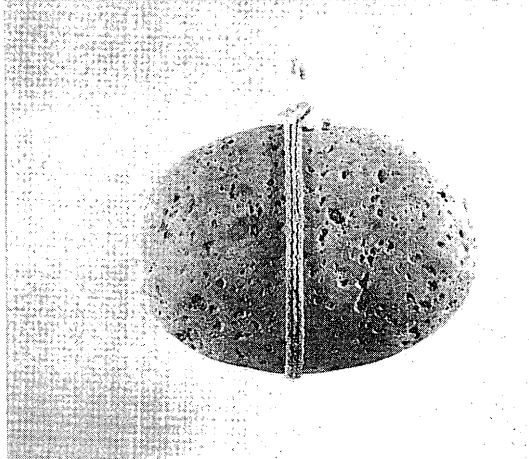
23



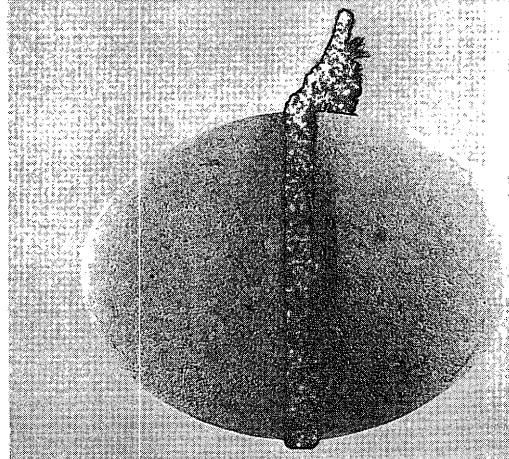
24



25



26



27

写真5 延縄用石錘 (縮尺: 不同)

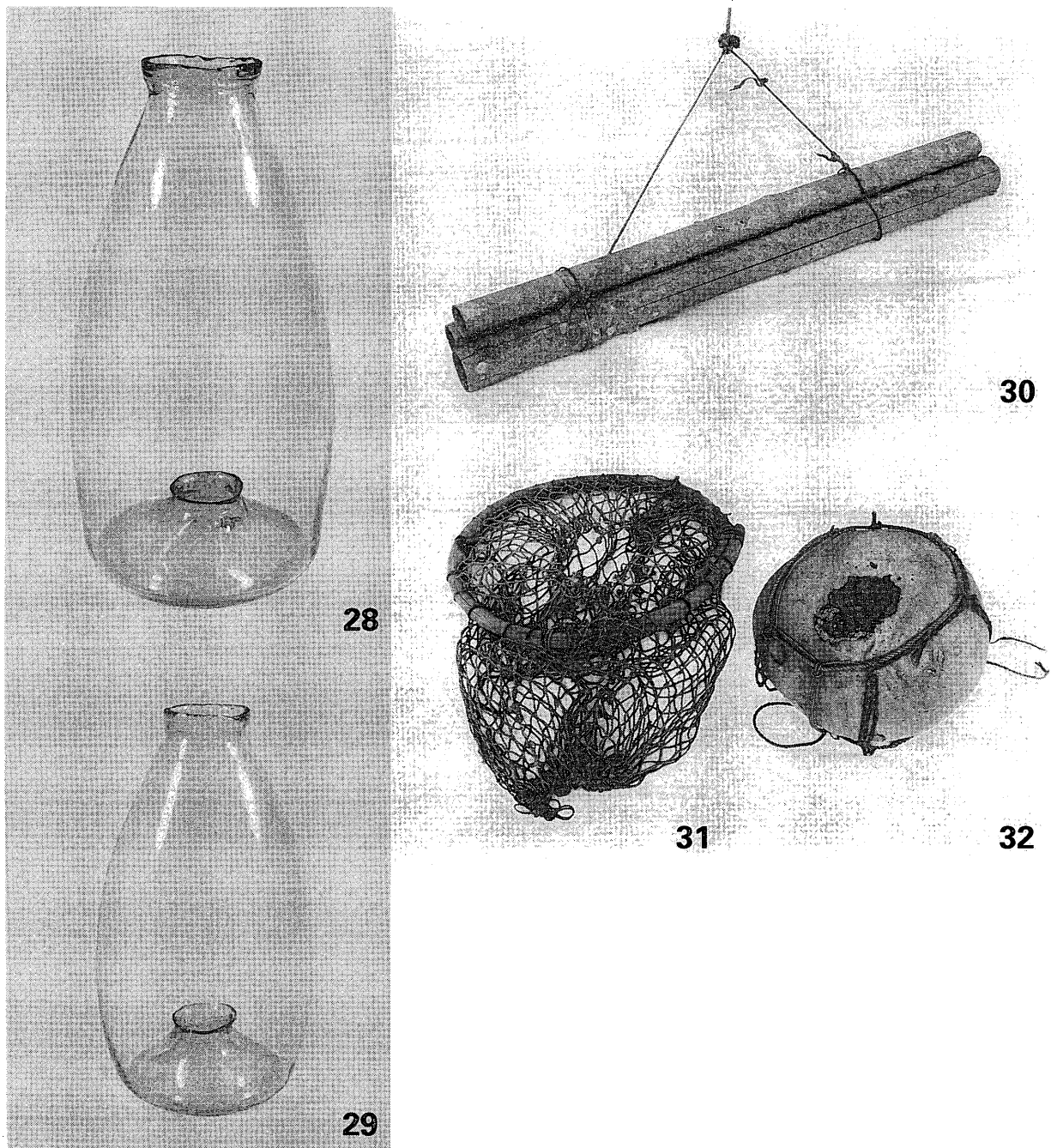


写真6 その他の漁具（縮尺：不同）

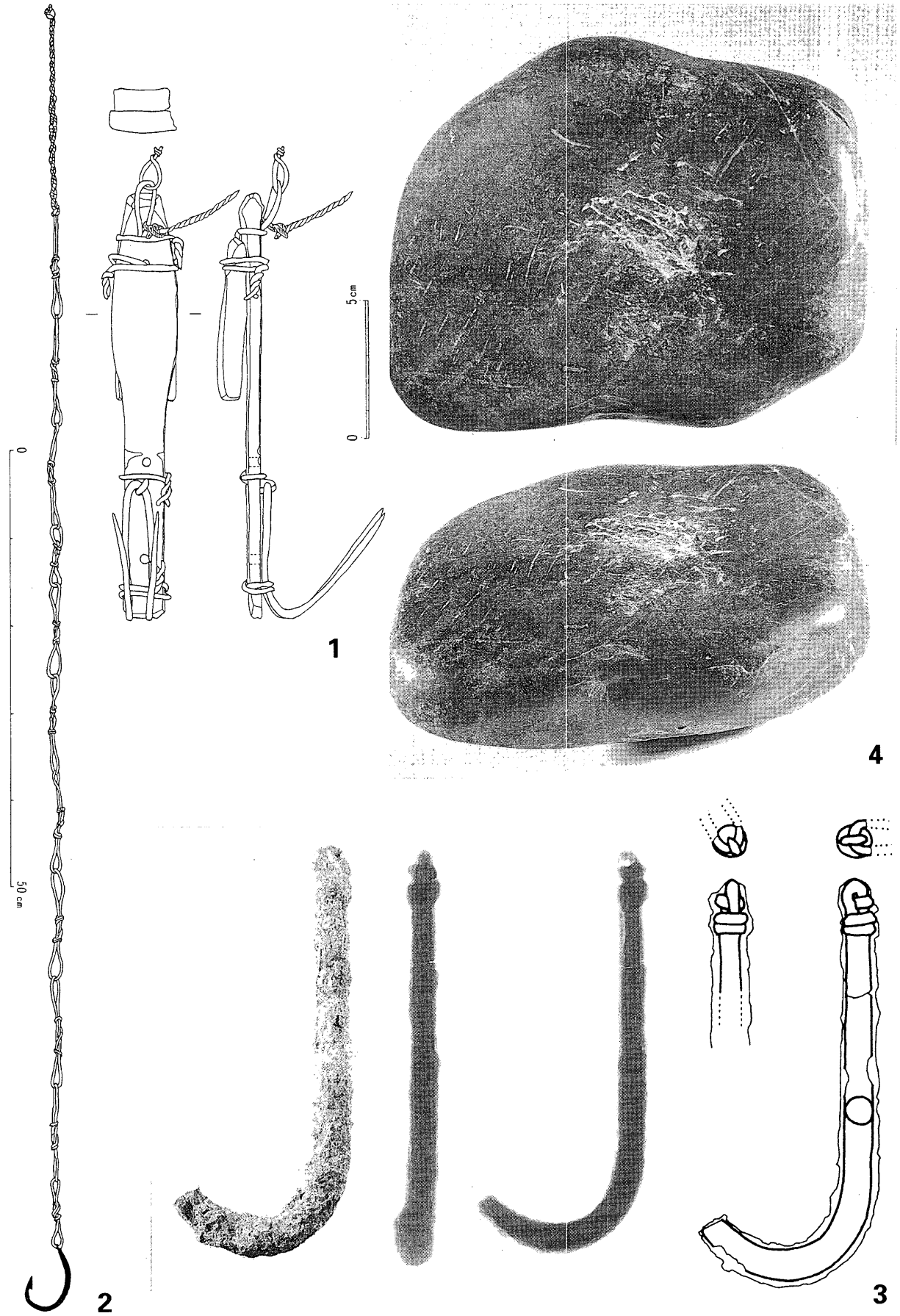
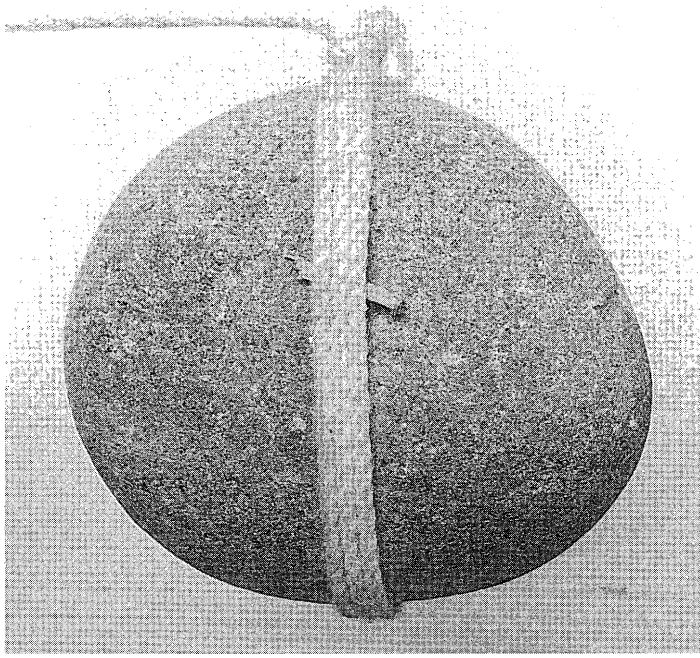
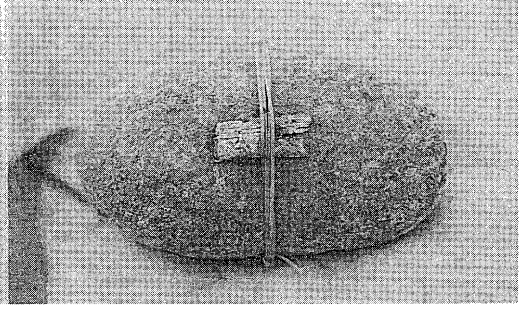


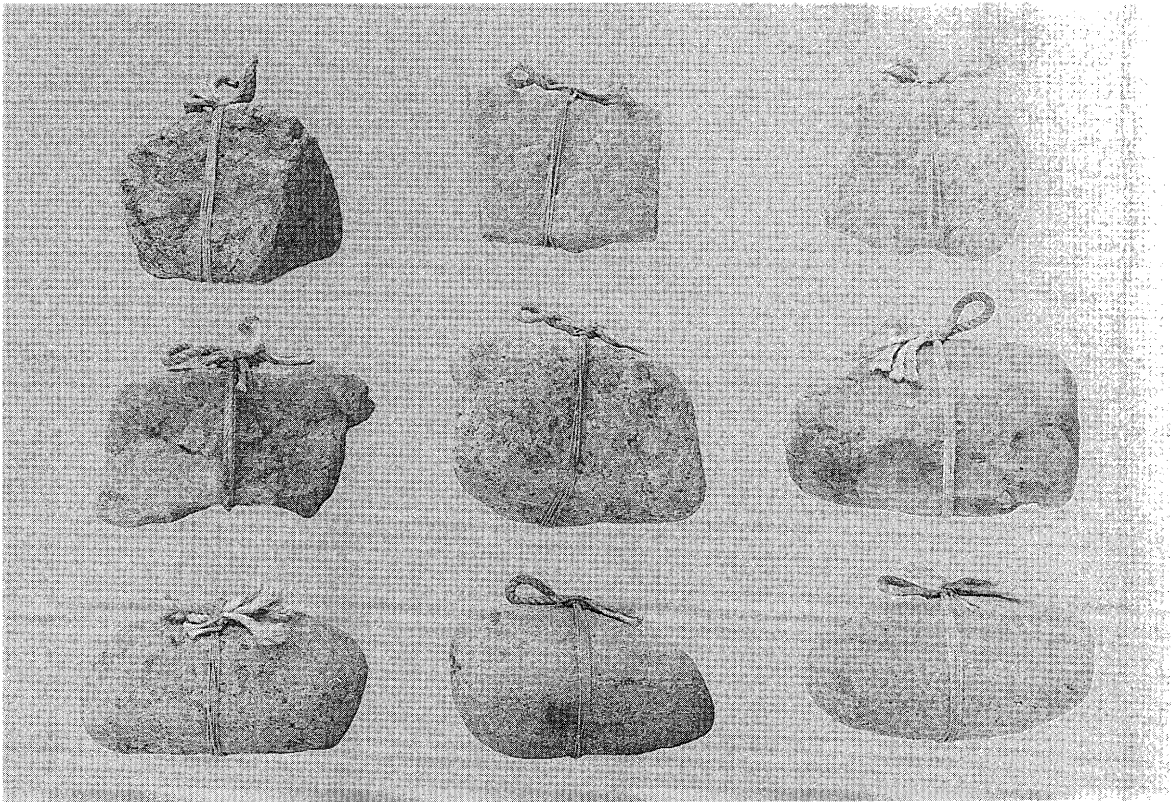
写真7 関連資料写真・実測図（縮尺：3・4のみ実大）



1



2



3

写真8 関連資料写真（縮尺：不同）